

地方行革をともに考える シンポジウム in 青森

開催日時：平成19年10月31日（水）

開 場：13：00

開 会：13：30

終 了：16：30

会 場：青森市男女共同参画プラザ
AV多機能ホール

主 催：総務省

後 援：青森県、青森県市長会、青森県町村会、東奥日報社

●プログラム

13:00 …… 【開 場】

13:30 …… 【開 会】

主催者挨拶：河合 暁（総務省自治行政局行政体制整備室長）

開催地挨拶：蝦名 武（青森県副知事）

13:40 …… 【基調講演】

「自治体をどう変えるかー <新しい公共>への挑戦」

講師：佐々木信夫（中央大学経済学部教授）

14:20 …… 【事例発表】

「市民が市民のためにわかりやすく作った日野市財政白書」 <東京都日野市>

高尾 満（日野市企画部財政課）

「市民活動支援補助金公開プレゼンテーション」 <山形県山形市>

齋藤 政美（山形市企画調整部企画調整課市民活動支援センター）

15:00 …… 【休 憩】

15:10 …… 【パネルディスカッション】

「新しい公共空間を形成する戦略本部となるために、

いま自治体に求められているものは何か」

パネリスト 佐々木信夫（中央大学経済学部教授）

町田 直子（NPO法人ACTY理事長）

柿崎 武光（青森県黒石市企画財政部長）

河合 暁（総務省自治行政局行政体制整備室長）

コーディネーター 高田 寛文（政策研究大学院大学教授）

16:30 …… 【閉会】

主 催 者 挨 拶

河合 暁

総務省自治行政局行政体制整備室長



本日はお忙しい中、地方行革をともに考えるシンポジウムに多くの方にお越しいただきまして、まことにありがとうございます。

少子高齢化の進展など社会経済情勢の変化に伴い、公共サービスへの期待やニーズはますます高まっています。その一方で、財政状況は非常に厳しく、経営資源に制約があります。このため行政の守備範囲は相対的に縮小しており、これからは行政と民間それぞれの持つ活力を結集し、地域全体としての力を高めていくことがますます必要となっています。

これまで、行政が主として提供してきた公共サービスについて、今後は地域において住民団体をはじめNPO、企業など多様な主体が提供する多角的な仕組みを考えていく必要があると思っています。そして、これからの地方公共団体は、地域のさまざまな力を結集し、新しい公共空間を形成するための戦略本部となり、行政自らが担う役割を重点化していくことが求め

られます。

このシンポジウムは、地方公共団体を取り巻くこうした状況の中で、地方公共団体はどのような取組を行い、今後さらに何が必要とされているのか、自治体関係者のみならず、地域住民の方々と一緒に考えることを目的に開催するものであります。

また、今年、昭和22年に地方自治法が施行されて60周年にあたる極めて意義深い年です。このような大きな節目の年にあたりまして、地方自治の意義と重要性を認識し、地方公共団体の一層の発展と、地方自治の進展につなげていきたいと思っています。

大変お忙しい中、佐々木先生をはじめとするご出演者の皆様、また、開催地として各面から多大なご支援とご協力を賜りました青森県庁の皆様に心から御礼を申し上げます。また、本日のシンポジウムが皆様にとって有意義なものとなりますよう祈念いたしまして、開会のあいさつとさせていただきます。



蝦名 武
青森県副知事

「地方行革をともに考えるシンポジウムin青森」が総務省の主催によりこのように盛大に開催されますことを、心からお祝い申し上げます。

青森県も地方交付税が大幅削減になり、三村知事のもと行財政改革を徹底してやってまいりました。それでもまだ基金に依存する体制から脱し切れてはいません。平成15年に作った財政改革プランで、我々は、平成20年度に歳入と歳出を一致させようと考えました。ところが、交付税が削減になりまして、結局、今まで貯めてきた基金を取り崩して財政運営をしなければならない厳しい現状にあり、明治末期の各藩の財政事情とよく似た状況を呈していると私は思います。

二宮尊徳という人物がいます。小学校の校庭に見かける、薪を背負って勉強している銅像の姿が一般的ですが、彼の改革の視点を紹介したいと思います。

服部家に入った二宮尊徳は、どのように財政を改革したのでしょうか。

それまでの服部家の行財政改革は、ただただ辛抱することでした。お殿様の着るものを絹から木綿に変え、食事は五汁一菜を三汁一菜に減らしていく。我慢に我慢を重ねていくのですが、一向に財政はよくなる。そこで尊徳はあれこれ策を考えます。

ご飯を炊いている女性に「10個あるかまどで、薪を何本使っているか」と聞きました。すると、「わかりません、数えたこともございません」という答えです。「では、今日から薪を数えてください」と言います。

日頃、100本の薪を使っていたとします。尊徳はその女性に「100本使うところを1本でも減らしてみてください、その1本を私が10円で買しましょう」と言います。その女性は、どのようにすれば薪を少なくすることが出来るか一生懸命に考えるわけです。ところが、なかなか思いつかない。そこで、さらに教えるわ

けです。「まず、灰の量を減らさない」と。あるいは「なべの底を磨きなさい」と。

女性は教えるに従います。そうすると、100本使っていた薪が90本になった。節約できた10本の薪は尊徳に買ってもらえますから、1日あたり100円が女性の収入になります。女性はやる気になって、もっと減らそうと工夫します。最終的には70本ぐらいまでいった。3割の削減を実現したわけです。

県の行財政もこの話と同じです。貴重な税金で賄っている事業について、我々は使うことしか考えていないということです。薪を使うことしか考えていなかったその女性が、節約すれば自分の収入になると知り、炊飯の効率を上げるために徹底して考えた。薪1本の節約効果が重なって、3割の経費削減という形で服部家の財政に反映されていく。問題意識を持って自ら考えることが大事なのです。

女性は喜んで、「1本100円で買っていた薪を80円にしてくれないかと交渉しますから、値引き分の1割を手数料として私にください」と提案し、尊徳は「いいですよ」と答える。

こうして服部家に働く人たちは、いろいろな値下げ交渉を始める。あっという間に財政改革が進んでいくわけです。

江戸末期、財政縮小を掲げて取り組んだ改革は、ほとんど成功していません。借金を返し財政改革に成功したのは、そのほとんどが新たな産業を興しているところでした。新たな産業を興すためにどうするかいろいろ考え、積極的に取り組んだところ以外はすべて財政破綻でした。現在の地方公共団体も同じであろうと思います。

私も財政当局から財政事情を聞くと、胃が痛くなるくらいどうにもならないなという気持ちになります。

現在の情勢が今後も続く中で、どうやって自分たちのまちをよくしていくか、ここにお集まりの皆様一人一人が考え、議論しながら、どうあるべきかということを実践していただくと有難い。40の市町村があれば、40通りのやり方があると思います。住民一人一人が一生懸命考えれば、アイデアが浮かび、まちは活性化していけるのではないのでしょうか。

今日は中央大学の佐々木先生をはじめ、東京都、山

形県などからお越しいただいた経験者がさまざまな話をさせていただきます。話の内容をご自身の市町村それぞれが置かれている状況に照らして解釈し、どうやっていくかということが大切だと思います。本日のシンポジウムが地域の活性化に大いに役立つことを期待し、ご参加の皆様にとって実り多いものとなることをお祈りします。